

## 浅間温泉の形成過程と集落構造

井田仁康・上野健一

### I はじめに

浅間温泉は、松本駅の北東約4kmに位置する伝統的温泉観光地である。浅間温泉の延観光客数は、1983年現在108万人に達し、松本市を中心とする松本盆地において最も重要な温泉観光地としての地位をしめている。しかし、1970年代以後、わが国における観光客の観光行動および嗜好が多様化したため、温泉観光地の観光客吸引力は弱まってきたとされる<sup>1)</sup>。浅間温泉も、こうした全国の温泉観光地と同様の傾向を示し、その各年の延観光客数は、この10年間ほぼ110万人と停滞の傾向にある。

他方、浅間温泉が松本市街と近接していることから、この集落の人口は増加傾向を示している。すなわち、1962年に9,781人であったこの集落の人口は、1972年に12,458人となり、1982年には15,369人に達したのである。

浅間温泉に関する地理学的研究は、この温泉集落の観光発展性の診断を目的とした服部<sup>2)</sup>および入湯客の地域的季節的特徴を明らかにした山村<sup>3)</sup>などがある。本稿は、これらの研究成果を踏まえ、次のような研究目的を設定する。すなわち、浅間温泉の形成過程およびその入湯客の地域構成を明らかにし、さらに浅間温泉集落の内部構造を説明することが本稿の目的である。

### II 浅間温泉の形成過程と機能

#### II-1 形成過程

浅間温泉は、日本書記に「東間の温湯」と記述された温泉と考えられ、古来、多くの入湯客を集めてきた。1590年(天正18)に松本地方の領主に就いた石川氏は、浅間温泉を支配し、領主専用の湯殿を設け

た。同時に、家臣にはこれとは別に湯を与えた。さらに、共同浴場を設け、その他の人々にも湯を開放した。その後も領主による温泉の支配が続けられたが、1658年(万治元)以降に、それまで黙認されていた内湯(個人持ちの湯)の私有が公認された<sup>4)</sup>。

さて、当時の浅間温泉は上浅間のみであった。しかし、1742年(寛保2)に上浅間一帯は、大洪水によって莫大な被害を受けた<sup>5)</sup>。当時、上浅間の住民の中には、分家および人口の増加を理由に移転を望む者が多かったため、この災害が契機となり、同年にこれらの住民によって湯久間、現在の下浅間が開発された。これとほぼ同時に、この地区に上浅間の源泉から一本の樋により、湯が引かれた。しかし、引湯した残りの湯を共同湯として使用することは長期間松本藩に認められず、これが公認されるのは1824年(文政7)になってからである。このように、浅間温泉では、内湯と外湯(共同湯)という2つの基本的な温泉所有形態が、江戸時代においてすでに存在していたのである。また、これらの湯を利用して、農業と兼業で湯屋を経営する者が多かった。しかし、当時の浅間温泉は街道沿いの宿場ではなかったために、湯治客以外の宿泊は許されなかったのである。換言すれば、江戸時代における浅間温泉は、保養・湯治温泉としての性格が強かったのである。

明治時代になると、養蚕業が盛んになったことと善光寺および御嶽参拝が自由になったことから、浅間温泉は明治以前の保養・湯治温泉からその性格を変えることとなる。すなわち、浅間温泉を中心とした80数戸の蚕種製造業者ができたことにより、浅間温泉は商談および接待のために利用されるようになり、歓楽的な温泉集落へと発展していったのである。浅間温泉の湯屋(旅館)は蚕種製造との兼業が多く、夏季に蚕種製造を主として行い、冬季に湯屋を営む

という兼業形態がよくみられた。

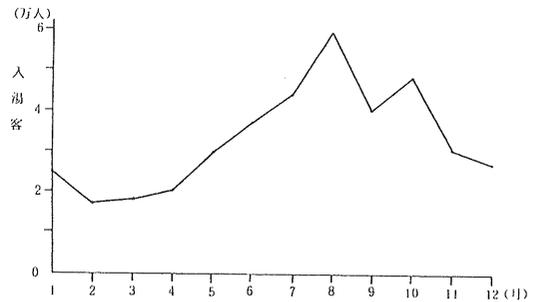
明治時代初期には、多数の外湯が設けられた。また、上浅間の源泉地帯から新源泉が発見されると必要に応じて売買され、その結果内湯持ちも増加した。こうして、内湯および外湯が増加し、明治時代中期には、その数が合計40数軒に達した。

大正時代の浅間温泉は、善光寺参詣客が多数投宿することとなり、このため旅館業者は養蚕業との兼業をやめて、専業化するものが多くみられるようになった。1924年に、松本・浅間温泉間5.2kmに筑摩鉄道浅間線<sup>6)</sup>が開通し、松本市街との交通連絡の便が改善された。

昭和時代にはいと、松本歩兵第50連隊の将兵が多数浅間温泉を利用することとなった。しかし、第2次世界大戦の激化にともなって、1944年に旅館がすべて休業となった。しかし、浅間温泉の戦後復興は早く、第2次世界大戦終了直後の1945年末には、すでに多数の旅館が営業を再開していた。その後、1956年に美ヶ原観光株式会社が設立され、1959年に浅間温泉スキー場の開設、さらに1969年に浅間温泉国際スケート場が開設されるなど、浅間温泉周辺の観光およびスポーツ・娯楽施設が整備された。また、1976年の三才山トンネル有料道路の開通および1981年の中央高速自動車道西宮線の開通により、浅間温泉と関東地方および中京、関西地方との自動車利用による時間距離が短縮されたのである。

## II-2 入湯客の季節的特性と地域構成

浅間温泉の入湯客数および入湯客の温泉利用目的は、かなりの季節的変動をもつ。第1図は、浅間温泉における入湯客の月別変化を示したものであるが、この図より、夏季および秋季、特に7・8月と10月とに入湯客が集中することは明らかである。7・8月の夏季は避暑を兼ねた家族単位の入湯客が多く、10月は紅葉見物の会社団体客が卓越する。これらを除く各月の入湯客は、若干の旅館・ホテルに対して行った聞き取り調査によれば、次のような特徴を示すといえる。すなわち、1月は新年会を目的とした客が多く、2月は会議を目的とした客が多くなる。3月から6月の間は、旅行会社の募集した団体客、小グループ旅行者および会議を目的とした団体客が卓越する。9月から10月にかけては紅葉見物の会社団体客が卓越し、11月から12月にかけては老



第1図 浅間温泉における入湯客の月別変化  
(1982年)  
(資料：浅間温泉旅館協同組合資料)

人クラブの団体客および忘年会を目的とした団体客が多くなるのである。

これらの入湯客の平均宿泊数は、長野県商工部観光課の調査によると、1.07泊である<sup>7)</sup>。したがって、浅間温泉は夏秋型の観光地であり、その入湯客は短期滞在型であるといえるのである。さらに、この調査によると、浅間温泉の入湯客は、その59.3%が松本城を見学し、27.6%が美ヶ原高原を、そして16.3%が善光寺をはじめとする長野市内を訪れていることが明らかになる。

次に、入湯客の地域構成を明らかにする。1983年のAホテルとBホテルにおける居住地構成は、第1表に示されている<sup>8)</sup>。この表から次のことが明らかになる。まず、第1に、長野県内に居住する入湯客が最も多いことである。Aホテルにおいては全入湯客の30.7%が県内の居住者であり、Bホテルにおいてはその43.2%が県内の居住者である。それらの客は冬季に集中し、新年会あるいは忘年会を目的として浅間温泉に宿泊する<sup>9)</sup>。第2に、長野県外の居住者に注目すると、関東地方に居住する入湯客が最も多く、次に長野県を除く中部地方に居住する入湯客、そして関西地方の入湯客が多いといえる。この傾向は、他の旅館における聞き取りにおいても確認された。なお、これら県外からの入湯客は、夏季および秋季に集中する傾向がみられる。

さらに、1983年における入湯客の居住地構成をより詳細に、県単位で検討することにする。なお、ここで対象とする入湯客は、データの制約によりAホテルのそれのみとする。

Aホテルにおける入湯客の居住地は全国の都道府

第1表 浅間温泉の入湯客の居住地構成比と入湯客密度(1983年)

居住地	A ホテル		Bホテル
	構成比(%)	入湯客密度(人/10万人)	構成比(%)
長野県内	30.7	413.0	43.2
関東地方	30.0	23.5	24.6
中部地方 (長野県を除く)	13.7	20.4	18.2
関西地方	11.2	14.6	11.2
四国地方	4.8	32.2	2.8
その他	9.6	7.0	

(資料：AホテルおよびBホテルの宿泊人名簿)

県にわたっているが、その居住地構成比をみると長野県および3大都市圏の人口集積地域のそれが高いことが明らかである<sup>10)</sup>。ここで、人口の影響を排除した居住地構成の地域的特徴を把握するために、人口10万人あたりの入湯客数を算定した(本稿ではこれを入湯客密度と定義する)。こうして作成された第1表によれば、入湯客密度は長野県から離れるにつれて低下する傾向をもつ。しかし、四国地方の各県は、浅間温泉との間に大きい距離をもつにもかかわらず入湯客密度が著しく大きいことが認められる。これは、Aホテルが四国地方に集客努力を行っていることの結果であると考えられる<sup>11)</sup>。

### Ⅲ 浅間温泉集落の内部構造

#### Ⅲ-1 源泉の分布と温泉権の形態

浅間温泉の地域的特徴を顕著に示すものとして、源泉の分布と旅館・ホテルを中心とした内湯および外湯の立地がある。したがって、ここでは浅間温泉の源泉および内湯と外湯について述べる。

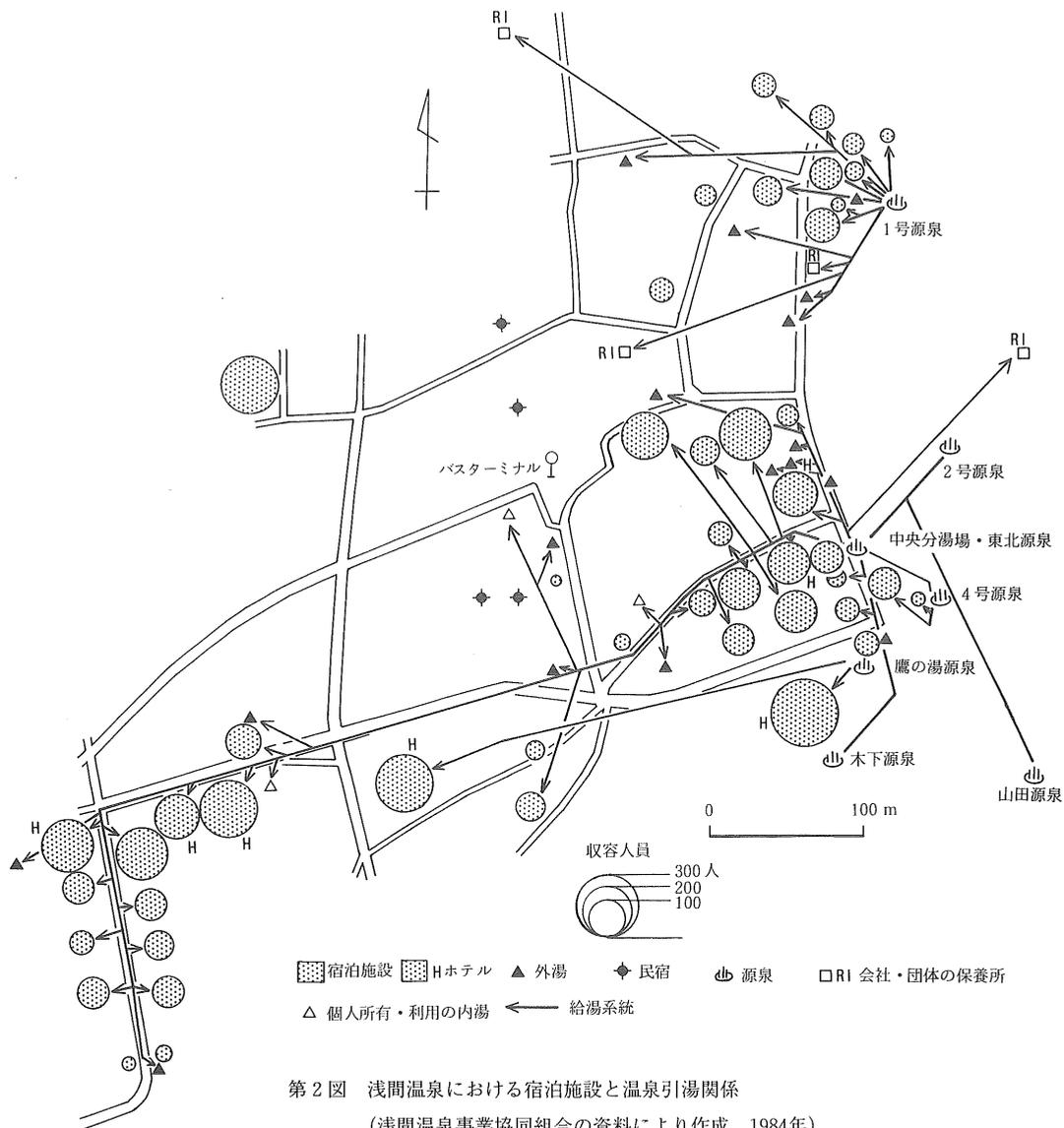
1952年、本郷村議会は浅間温泉を発展させる目的で地質予算の計上を決議し、それに基づき翌1953年に浅間温泉事業協同組合が設立され、温泉掘さくが

開始された。これ以前の浅間温泉は、20数カ所の源泉を持ち自然湧出に依存していたが、掘さく後は、掘さくした源泉から湯をポンプで吸み上げ引湯が行われている。しかし、この掘さく事業により以前から存在する源泉の湧出量が著しく減少したため、本郷村当局と既設源泉の所有者との間に抗争が生じた。この抗争は、新源泉の湯を従来の湯量に基づいて既設源泉の所有者に引湯することで解決された。したがって、内湯および外湯の形態はそのまま存続し、1984年7月現在、浅間温泉の源泉は7カ所であり、内湯は50、外湯は17に達する。

浅間温泉の源泉は、すべて上浅間に集中している(第2図、第2表)<sup>12)</sup>。1号源泉は、御殿山の麓に位置し、1977年に掘さくされた。この源泉から毎分280ℓの湯がくみ上げられ、近隣の旅館・ホテルおよび寮、外湯に給湯される。2号源泉は、不動山の麓に位置し、毎分288.5ℓの湯を湧出する。この湯は、4号源泉および山田源泉、大下源泉、東北源泉から湧出した湯とともに、直接あるいは分湯槽を経由して、浅間温泉全域の旅館・ホテルおよび外湯に給湯される。これらの源泉は、東北源泉を除き、1953年以降に掘さくされたものであり、浅間温泉事業協同組合が所有している。この事業協同組合は、温泉の開発および源泉の管理をしており、1984年7月現在、浅間温泉のすべての内湯および外湯67軒がこれに加盟している。なお、東北源泉は明治時代以前に掘さくされたものであり、毎分121.1ℓを湧出し下浅間共栄会が所有している。また、鷹の湯源泉は個人所有であり、1917年に掘さくされ、毎分82ℓの湯を湧出する。この湯は、2つのホテルにのみ給湯されている。

次に内湯について述べる。内湯を利用している旅館・ホテルは、浅間温泉旅館協同組合(41軒加盟)を組織し、上浅間と下浅間に集中的に立地する。これらの旅館・ホテルの他に、公立学校共済組合が運営するM荘、国鉄の保養所、中部電力が所有するA荘、この地方の代表的な民家建築(本棟造り)として保存されている善隣荘なども内湯をもち、それらの多くは上浅間に立地する。

浅間温泉の外湯は、明治時代から浅間温泉独特の方法で運営されてきた。それは湯株制と称し、湯株(温泉使用权)所有者が12~18人で構成される集団をつくり1つの外湯を運営するのである。これらの外



第2表 浅間温泉の源泉表

源泉名	1号源泉	2号源泉	4号源泉	山田源泉	大下源泉	東北源泉	鷹の湯源泉
所有者	浅間温泉事業協同組合	浅間温泉事業協同組合	浅間温泉事業協同組合	浅間温泉事業協同組合	浅間温泉事業協同組合	下浅間共栄会	個人
湧出量(ℓ)	280.0	288.5	290.9	281.8	218.1	121.1	82.0
温度(℃)	45.5	51.3	52.3	47.0	47.8	51.4	44.0
掘さく年	1977	1953	1954	1960	1963	明治時代以前	1917

(資料：浅間温泉事業協同組合)

湯は、それらの慣習的利用形態から、ほぼ3タイプに分けられる。第1は、湯株所有者からなる湯株仲間のみが利用できる外湯であり、第2は、湯株仲間ばかりでなく、入湯料を支払うことによって一般の利用者も入湯できる外湯である。第3は、旧本郷村浅間地区住民の共有財産である外湯である。したがって、この外湯は湯株所有者によって運営されているものではない。これには「せんきの湯」と旧本郷村が1931年に浅間地区住民から借り受け、松本市と合併後は松本市が運営する「昭和の湯」とが該当する。この2つの外湯は、有料で、一般に開放されている。

### Ⅲ-2 浅間温泉集落の内部構造

浅間温泉集落は、前述した集落の形成過程および集落内部の慣習から上浅間、中浅間、下浅間の3地区に分けることができよう。以下では、それぞれの地区内部の特徴を述べてみたい(第3図)。なお、本稿では、これらの地区を従来の慣習を参考にして次のように区分した。すなわち、上浅間は第3図のaとbおよびcとを結ぶ直線の東側の地区とし、中浅間はaとbおよびcとを結ぶ直線の西側で、かつdとfとを結んだ直線の東側およびdとeを結んだ直線の北側の地区とする。さらに、下浅間はdとeとを結んだ直線の南側の地区とする。

#### 1) 上浅間

御殿山および不動山の麓を中心とする上浅間は、前章で述べたごとく、浅間温泉集落の中で最も古くから集落の立地していた地区である。この地区は、浅間温泉の7源泉すべてが集中しているため、旅館・ホテルを中心とした内湯および外湯が多数立地する。

上浅間には、27軒の内湯旅館・ホテルが立地し、その多くは明治時代から大正時代にかけて立地している。また、それらの旅館・ホテルの1軒は、江戸時代に開業した永い伝統をもつ。1973年以降、各旅館・ホテルは、近代的な鉄筋コンクリート構造に新・改築した。その結果、収容人員が200人以上に達する大規模旅館が3軒みられるようになった。他方、伝統的な木造建築の内湯旅館も残存することから、この地区は、比較的新しい中・高層旅館・ホテル群と伝統的な低層木造旅館群とが混在した景観を

呈している。また、12軒の外湯が立地し、それらの建物は木造平屋建てあるいは2階建て構造であることが多い。これらの旅館・ホテルおよび外湯は、上浅間の南部と北東部に集中している。しかし、これら内湯および外湯が集中している地区は、近年の人口増加に伴い、次のような景観の変化がみられるのである。すなわち、内湯所有者の個人住宅および内湯旅館が温泉付アパートに建て替えられたのである。内湯所有者の個人住宅は、1972年に温泉付アパートに建て替えられ、内湯旅館の1つは旅館を廃業し、1984年6月現在、温泉付アパートに建て替える工事が進められている。他方、上浅間の北西部は、浅間温泉の人口が増加していることを反映して、住宅およびアパートが卓越するのである。

上浅間は、駐車場が多いこともその特徴の一つである。それらは、旅館・ホテルの利用客専用駐車場とこの地区内の住民用駐車場との2種類に区分できる。この地区内の旅館・ホテルは、その敷地内に専用駐車場をそれぞれもつが、それだけでは収容しきれず、それぞれの旅館・ホテルの近くに駐車場を確保する事例が多い。また、新・改築の際に1階を駐車場とする旅館・ホテルもみられる。旅館・ホテルに隣接した一般住宅の中には、それらの敷地の1部を宿泊客用の駐車場として利用している例もみられる。なお、地区内の住民が利用する駐車場は、住宅およびアパートの卓越したこの地区の北西部にみられる。

また、上浅間は山麓に位置するために、滝がかり林地も広く分布する。したがって、浅間温泉集落内でも自然景観が最もよく残されている地区だといえる。さらに、この地区には御射神社、松本城主小笠原家の墓<sup>13)</sup>などの文化的遺跡も多数残されている。したがって、この地区は宿泊客の散策には最適である。そこで、浅間温泉観光協会は、1980年に上浅間を中心とした集落内10カ所に道祖神を設置し、それらの道祖神と上述の文化遺跡および滝などを巡る散策コースを整備した。

このように、上浅間は源泉と内湯を利用した旅館・ホテル、外湯、駐車場が集中していること、そして自然景観と文化遺跡が多数残されていることに特徴がある。

#### 2) 中浅間

中浅間は、松本市役所本郷支所を中心とする地区



- |         |         |          |         |                    |        |        |        |             |        |      |
|---------|---------|----------|---------|--------------------|--------|--------|--------|-------------|--------|------|
| 商・工業用地  |         | 宿泊用地     |         | 住宅用地               |        | 公共用地   |        | 農業用地・その他    |        |      |
| ■ 事務所   | ☒ 飲食店   | ☒ 旅館・ホテル | ☒ 一般住宅  | ☒ 公共的建築物<br>(下記以外) | ☒ 水田   | ☒ 銀行   | ☒ 駐車場  | ☒ 会社・団体の保養所 | ☒ アパート | ☒ 畑  |
| ☒ 交通・運輸 | ☒ サービス業 | ☒ 外湯     | ☒ マンション | ☒ 学校               | ☒ 寺院   | ☒ 一般商店 | ☒ 風俗営業 | ☒ 社宅        | ☒ 神社   | ☒ 荒地 |
| ☒ 土産物屋  | ☒ 車庫    | ☒ 空屋     | ☒ 医院    | ☒ 幼稚園・保育所          | ☒ 広葉樹林 | ☒ 工場   | ☒ 空屋   | ☒ スーパー      |        |      |

第3図 浅間温泉主要部における土地利用  
(1984年5月現地調査による)

である。中浅間の南部は、旧本郷村役場庁舎をそのまま利用している松本市役所本郷支所、本郷消防署、浅間温泉郵便局、第八十二銀行浅間温泉支店などの業務施設が多数立地し、さらに15の飲食店および12の土産物屋の立地とに特徴づけられる。これらの飲食店および土産物屋は、第3図のaとdを結ぶ幹線道路沿いに集中する。また、本郷小学校、浅間児童館、本郷公民館、松本社会文化会館などの公共施設が多数立地することも、中浅間の特徴である。これらは、中浅間の西部に集中的に分布する。

中浅間の北部は、上浅間のそれと同様に住宅およびアパートが卓越する。この住宅地の中に、民宿が4軒分布する。浅間温泉における民宿は、1970年頃から増加し、1984年7月現在で9軒をかぞえる。これらは、美鈴湖畔の民宿とともに浅間温泉民宿組合を組織している。また、この地区は水田および普通畑がかなり広く残存しており、本地区内の住民に利用される駐車場も多い。

このように、中浅間は公共施設および業務施設が多数立地し、飲食店と土産物屋が集中していることに特徴がある。

### 3) 下浅間

下浅間は、3地区のなかで松本市街に最も近い。下浅間は、上浅間の源泉から引湯することによって内湯旅館・ホテルおよび外湯が経営されてきた。下浅間の10軒の内湯旅館・ホテルは、浅間温泉の幹線道路沿いに集中的に分布する。それらの旅館・ホテルは、上浅間のそれらと同じく明治時代から大正時代にかけて開業している。しかし、この地区の内湯旅館・ホテルは近代的な建物であり、しかも1旅館・ホテルあたりの平均収容人員は123.3人となり、上浅間の82.4人よりも多い。したがって、下浅間の旅館・ホテルは近代的建物であることおよびその規模が比較的大きいことが特徴となる。

下浅間の幹線道路沿いを除いた地区は、住宅およびアパートが卓越する。特に、下浅間の南部は、4軒の民宿と1軒のユースホステルが住宅地のなかに点在している。また、水田などの農業的土地利用、空地などがこの地区で多くみられる。

このように、浅間温泉の松本市街地からの入口にあたる下浅間は、幹線道路沿いに近代的内湯旅館・ホテルが集中的に立地すること、一般住宅およびアパートが多数立地することが特徴である。

## IV まとめ

本稿は、浅間温泉の歴史的発展過程を概観し、入湯客の居住地構成および浅間温泉集落の内部構造を明らかにした。浅間温泉の入湯客の居住地は、長野県内をはじめ関東地方、中部地方など全国にわたる。また、浅間温泉集落の内部構造は、源泉の位置および江戸時代以後の集落の形成過程などに強く影響されている。現代の浅間温泉集落を上浅間、中浅間、下浅間に区分すると、それぞれの地区は次のような特徴がある。すなわち、上浅間は源泉と内湯を利用した旅館・ホテル・外湯・駐車場が集中し、自然景観と文化遺跡が多数残されていることに特徴がある。中浅間は、公共施設および業務施設が多数立地し、飲食店および土産物屋等が集中していることが特徴であり、下浅間は幹線道路沿いに近代的内湯旅館・ホテルが集中的に立地することが特徴である。

さて、近年における浅間温泉の観光客数は、経年的にほとんど変化がみられない。それにもかかわらず、浅間温泉集落の内部構造の変化が以下のように認められるのである。

浅間温泉は、近年住民が著しく増加してきた。これは、浅間温泉集落における住宅およびアパートの増加に起因し、しかも、江戸時代に成立していた上浅間の旅館・ホテル街の中にも変化を与えた。すなわち、内湯所有者の個人住宅および内湯旅館が温泉付アパートに建て替えられたのである。また、住民の増加は、このような景観の変化だけでなく外湯の利用状況にも変化を与えた。つまり、入湯料を支払い外湯を利用する住民が増加したのである。この傾向は、特に下浅間の外湯で顕著にみられる。

浅間温泉集落の内部構造は、住民の増加だけでなく温泉の利用客によっても変化させられている。浅間温泉を訪れる客は、従来300人以上の団体客をはじめとする多人数で構成される団体客が多かったのに対し、近年では家族団体客をはじめとする小人数の団体客が卓越してきている。これらの団体客は、モータリゼーションの進展により自家用車を利用することが多くなっている<sup>14)</sup>。また、従来、浅間温泉の利用者は娯楽目的の客が多かったのに対し、近年では会議を目的とした客が増加している。浅間温泉芸苑組合での聞き取りによると、大正時代末期には110人を数えた芸者は、1958年頃から減少しはじ

め、1984年7月現在では33人を数えるにすぎない。すなわち、芸者の数は入湯客の旅行目的の変化を反映していると考えられる。さらに、温泉地に宿泊しながら、料金の関係などから必ずしも内湯旅館・ホテルを利用するとは限らなくなっているのである。このような浅間温泉の利用客の変化に対応して、浅間温泉内の家族向け散策コースが整備され、会議用の施設(松本文化会館)が1975年に建設された。また、低料金で宿泊できる民宿も開設された<sup>15)</sup>。さらに、浅間温泉の入湯客だけでなく地域住民にも自家用車

の利用者が多いことから、1970年頃から駐車場が著しく増加したのである。他方、既存の内湯旅館・ホテルは、新・改築することで設備を充実させ、旅行会社およびバス会社と協定を結び入湯客の誘致に努めている。

このように、近年における浅間温泉の住民の増加とその利用客の変化は、浅間温泉の景観に変化を及ぼし、今日の浅間温泉集落の内部構造にもそれが顕著に現れているのである。

本稿を作成するにあたり、奥野隆史先生をはじめとする地誌学研究グループの先生方に御指導をいただきました。また、現地調査において、信州大学の宮坂正治先生、長野県庁の三沢敏夫氏、松本市役所の宮坂喜一氏、浅間温泉協会の寄藤之征氏、ホテルおもとの山本浩司氏、北大湯旅館の石川充信氏の御協力を頂きました。その他現地調査に御助力頂きました多数の方々へ深く感謝申し上げます。

#### 〔注および参考文献〕

- 1) 浅香幸雄・山村順次(1974)：『観光地理学』大明堂，p56.
- 2) 服部銈二郎(1979)：浅間温泉の観光地診断—地域診断学序論—。立正大学文学部論叢，64，1～48.
- 3) 山村順次(1980)：日本温泉観光地の入湯客の地域的・季節的特性。地理科学，33，1～13.
- 4) 松本市・東筑摩郡郷土史料編纂会(1957)：『松本市・東筑摩郡誌』，第1巻，394～401。  
松本市・塩尻市・東筑摩郡郷土史料編纂会(1968)：『松本市・塩尻市・東筑摩郡誌』，第2巻下，1136～1146。  
本郷村誌編纂会(1983)：『本郷村誌』，1328ページ。
- 5) 上浅間は、土砂崩れの生じやすい地形であるため、この後も大雨および台風などによる被害をたびたび受けている。
- 6) 1932年に松本電鉄浅間線と改名されたが、1964年には自動車の普及に伴う乗客の減少および自動車交通の障害となることなどを理由として廃止され、バス輸送に転換された。
- 7) 長野県商工部観光課(1982)：『中央自動車道西宮線県内全線開通に伴う観光客流動調査結果(その2)』，102ページ。この調査は、1981年7月から10月および1982年1月と2月に実施されたもので、調査票を県内の旅館等に配布し、観光客に記入を依頼したものである。なお、浅間温泉における観光客の回答グループ数は123であった。
- 8) A ホテルの収容人員は200であり、B ホテルのそれは330である。両ホテルは、浅間温泉では比較的規模の大きいものである。
- 9) A ホテルに宿泊した長野県内の居住者の54.6%は、1月、2月および12月に宿泊している。
- 10) A ホテルの入湯客の居住地構成比が3%以上の都道府県は、長野県(37.0%)、東京都(10.9%)、愛知県(5.7%)、茨城県(4.8%)、神奈川県(4.3%)、千葉県(4.2%)、大阪府(3.9%)である。
- 11) これらの入湯客のなかには、航空機を利用する者も少なくないと考えられる。松本電鉄航空サービスセンターの調査によると、1983年の松本空港から大阪空港へ向かう航空旅客の11.4%は、大阪空港で四国地方行きの航空機に乗り換えるのである。なお、松本空港と直接航空線で連結されている空港は、大阪空港のみである。
- 12) いずれの源泉においてもその泉質は、単純アルカリ泉である。
- 13) 1613年に松本城主に就いた小笠原秀政およびその子忠脩など父子三代の墓碑である。

- 14) 前掲 7)によると、浅間温泉を含む長野県中信地域の観光客の53.0%は、自家用車を利用している。
- 15) 浅間温泉には、温泉をもたない宿泊施設として、民宿の他に浅間温泉観光旅館共栄組合に所属する9軒の旅館がある。